

宮古発

橋に「プレート」取り付け



復興支援道路として整備が進む宮古市・和井内地区の国道340号線の橋に、地元の小学生が橋の名前を書いたプレートを取り付けました。橋の名前は「鞭牛(べんぎゅう)下の橋」、全長は120メートルです。江戸時代に宮古街道を切り開いた地元出身の僧「鞭牛」にちなんで命名されました。鉄製のプレートの文字は和井内小学校の児童が書いたもので、児童10人が4箇所に取り付けました。この工区は、廃線となったJR岩泉線のルートとも重なる地域の生活路線で、その整備に大きな期待が寄せられています。(1/28 ニュースエコー)

盛岡発

復興シーフードショー

県内の水産業の復興を広く発信し、水産物の消費拡大を図る「復興シーフードショーIWATE」が盛岡で行われました。このイベントは県と県漁業協同組合連合会などが企画したもので、会場では三陸沿岸でとれた魚介類を食材にした水産加工品のコンクールが行われ、県内36社から110点が出品されました。イクラをとり終えたメスの鮭と殻が傷ついたホタテを使用し作ったシュウマイなどアイデアあふれる商品が並びました。シーフードショーには県内外から外食産業の関係者らも参加し、県内の水産加工業者にとって販路の拡大を図る商談の場ともなりました。(2/2 ニュースエコー)



大船渡発

屋形船『潮騒』

大船渡湾内を巡りながら地元の海の幸を満喫できる「屋形船」が間もなく運航を開始します。屋形船『潮騒』は、湾内で養殖されたカキなどの地元の海産物や加工品を船の上で楽しんでもらおうと「大船渡6次連携ブランド開発グループ」が本格運航を目指しているものです。震災前から海を生かした観光が重要と考えていたホテル経営者、大津波による施設の流失から復興を成し遂げ、出荷を再開したカキの生産者。復興への志を同じくする仲間が集まって設立した「大船渡6次連携開発グループ」の事業は、昨年10月キリングループから3000万円の助成を受け大きく前進しました。大船渡の食の魅力を発信する強力なツールとしての期待を乗せて、2月半ばには運航を始める予定です。(2/4 ニュースエコー)



宮古発

さんりく元気ラジオ!

(ワイドステーション内 毎週水曜日放送)

今週はみやこハーバーラジオの木村悠里さんが、宮古水産高校実習船「リアス丸」について伝えてくれました。1月30日に宮古水産高校の生徒25名を乗せてハワイ沖に出港したもので、マグロ延縄の実施など約50日間の実習となります。生徒たちはこの実習を通して海に慣れ、航海・漁業の技術と知識を習得して、資格取得を目指します。また乗船実習は人間教育の動く教室ともなっています。漁師や漁業関係の仕事希望している生徒が多く、出港前のインタビューでは「不安はあるが、自分の夢を叶えるために一生懸命頑張ってきた」と話していたという事です。(2/4)



「IBC復興支援室だより」facebookでも発信中
詳細はIBC公式サイトから <http://www.ibt.co.jp/>
IBC復興支援室事務局 019-623-3122